

政治の事を話すとるといささか重くなる、というより正直何の知識もない、何をどうすればいいのかもわからない。とってただ単に愚痴をぼやきを、マスメディアの受け売りを、政治家の批判をしてもつまらない。気楽にこれが好きこれは良くないと言えればいいのだけれど、それでその先どうなるどうする、それでそれとそれとの関係はどう説明するどう解釈する、とつまらない事を考え過ぎるのかもしれないが、考えもせず先に口が開いてしまうというのはどうも・・・ね。「国家百年の計画」「より良い生活を、より発展を」オレが生きてきたこの時代、人々は上を、もっと上をと叫んで生きてきた。人の生活が楽になった、危険が無くなった、何でも手に入る・・・そう食う物も着る物も何でも手に入る。快適な生活、簡単に早い移動、何でも見られる、何でも運べる、これはみんな文明文化のおかげというけれど、コレほんとは良くないことばかりじゃないのか・・・人間じゃまくさい事、しんどい事、嫌な事をしなければ、わからないことは調べて、娯楽に走らんと、素食事食って・・・。がはは、たまにはイイ物食いたい、たまにはイイ物着たい、たまにはイイ事をしたい、とオレも本音。

原子力発電の重大事故が起きて「だから言ったじゃないか、あれには反対、あれは危ない、あれは良くない」言ってきたたたくさんの人たちも、残念ながら賛成・推進派の人たちを糾弾できない。なぜならオレも含めてほとんどの人がその電力の、その便利さ、それが生む富の恩恵を受けてきた。反対したとはいえ止められなかった、反対したとはいえ、その電力は使った、此処に生きている限り罪と罰はすべての人に同じく付いてくる。最近になって物づくりの大会社の社長連が「原子力発電は必要だ」「代替えエネルギーは無い」と叫びだした。それに前後して政治家が「原子力発電は必要だ」といい始めた。「原子力発電は必要だということは当然だ」とマスメディアで話す人もいる。ほんとに代替えエネルギーは無いのかね？発電も核爆弾もほんとにやめられないのかね？

「この島はウチのじゃ」と来る中国船に放水する日本の海上保安庁。「ここは元々ウチのもの」と人を常駐させる韓国。「此処はロシアの領土」とロシア国民が生活する北方四島。日本の旗を焼かれるのは悔しい、日本人が拉致監禁殺害されるのは悔しい、日本の工場や店舗が破壊略奪されるのは悔しい。何処の国の人もこういう場面に合えば、見れば、報道されれば、悔しい、残念、報復しようと考え思うだろうね。

オレなんか「これとこれが好き」で興味を持って生活している、「後の事は知らん分からん」と済ましている、政治をする人は浅くても全部知らんと、全部の事を考えんと、と思うと、それは大変な仕事だ。大変な仕事だけど、1年間も日本の首相を務めたら、あっちこっちから「あいつはアカン、あんなやつはワカッタン」と非難ごうごうで、次の首相はこれとこれでいかがと、マスメディアが騒ぎだす。彼ら毎年新しい政治家を作ることを仕事にしているんじゃないのかな。見る方聞く方もそれが楽しくて面白くて、エンヤエンヤと喝采。“一億総白痴”という言葉が昔あったけど、やはりマスメディアが作った言葉かな。今時の日本の政治、首相も“一億総白痴”の人々の産物かな。

図版は四国魚市場のスケッチ。

聖老人という本を戴いてばらばら、中に日本昔話のおもしろい処を見つけた。聖老人とは数千年も生きた屋久島の縄文杉を著者が渾名を付けてそう呼んでいるのだそうだが、その本の中身の話はまた後日。

貧乏な家族が居た。来る日も来る日も貧しかったが、とある日、福の神がその家にやってくる事になった。「おい、何でそんなに簡単に福の神がやってくるのだ、何で福の神がやってくる事がわかるのだ、昔話にしてもそりゃ出来すぎではないのかね・・・」と覚めた目付きで言わないで聞いて下さい、これは昔話なのだから。一步一步近づく福の神

の足音が聞こえてくる。家族はまだかまだかとその足音の近づくのを待ちかまえていると、「ヒュー」と家の中から淋しそうな悲鳴に似た啜り泣く声。その声は今までその家で家族と一緒に暮らしていた貧乏神の声だった。貧乏神は泣きながら家族に懇願した。「どうぞ私を追い出さないでください、どうぞ・・どうぞ・・」何度も貧乏神に懇願された家族は決心した。どンドン戸を叩く音「福の神がやって来ましたよ」戸を開けた主人は「帰れ、お前なんかいない、帰れ・・」と追い帰しました。「なんで？私は福の神なのに・・」と呟きながら帰って行った。その後その家族は元のように貧乏のまま幸せに暮らしました。そして屋根裏には貧乏神も幸せに暮らしました。

万葉集の雑誌をばらばら、えらそうなことを言いますが、和歌など素養も教養もなくただ訥々と、振り仮名をたどって口ずさむ程度ですが、“これだ”という歌を見つけました。山上憶良の貧窮問答歌です。

伏せ盧の（いお） 曲げ盧の内に 直土に（ひたつち） 藁解き敷きて  
父母は 枕の方に（かた） 妻子どもは 足の方に 囲み居て 憂へ吟ひ（さまよひ）  
かまどには 火気吹き立てず（ほけ） 甑には（こしき） 蜘蛛の巣かきて 飯炊く（いいかしく）  
ことも忘れて ぬえ鳥の のどよひ居るに（を） いとのきて 短き物を 端切ると 言えるがごとく  
しもと取る 里長が声は（さとをさ） 寝屋処まで（ねやど） 来立ち呼ばひぬ（きたち）  
かくばかり すべなきものか 世の中の道

屋根が潰れかけた掘立小屋に住んで、地べたに藁を敷き、両親はこっち、妻子はあっちと身を寄せ合う。かまどには煙もなく、飯も炊いていない。ぬえ鳥のように細々嘆いている。鞭を持つ役人が寝床まで来てわめき散らす。と解説、本当はもっと長い。宮廷の歌の多い万葉集の中で、いい物“見つけ”である。

ついでにもうひとつ、良寛さんの「襤褸また襤褸」本当は漢詩 下記はその解説をネットからいただいた。

襤褸 是 生涯。食は裁かに路辺に取り、家は実に蒿菜に委ねる。月を看て 終夜嘯き、花に迷うて 言に帰らず。一たび保社を出でしより、錯って箇の駑駘と為る

（衣はぼろのように破れ、その破れ衣が私の生涯である。食はわずかに路傍で取り、家はよもぎに独占されている。月を見ては一晩中口ずさみ、花を眺めては心を奪われてしまう。一度、円通寺を去ってからというもの、間違っこんな大馬鹿になってしまった）

なんでお前はそんなに貧乏、貧窮・・が好きなのかね。憧れか、精神の浮遊か昇華か、富者のさまよい事か。年間数千万円の収入、資産管理で数千前円の収入、蓄えは数億円。そんなお前が・・。とザレてみた。

図版は定点観測 お汁たっぷりの絵の具が入った。

0112 イテテの続き 111012

地区運動会があった。準備、本番と無料奉仕の二日間、「邪魔くさいなあ、おもしろい事があるかも」と複雑なおっさん心かな。餓鬼の頃より運動会は好きではなかった、嫌いだった。走るのが遅い、すぐに息が切れる、運動は苦手だなと思う心が、突っ走る仲間の少年たちを眩しく見ていたのか・・。

元体育の先生、元陸上部員というような方々が、てきぱきラインを引き、笛を吹き、ピストルを打ち、人を引率、さあ勝った順番に賞品ですよと時間が経っていく。「集合、整列、気を付け、右へ習え」子ども時代に教えられた言葉

が此処では息衝いている。今頃のオリンピックの入場、行進、整列は三々五々おしゃべりしながら、笑いながら、楽しげにしかも国旗を誇らしげに掲げて歩いている。軍隊のように「集合、整列、気を付け、右へ習え」それもいいけど。

運動会が始まると、することもなくぶらぶらしていた。オレより少し若そうな方、ピストルを打ち方が堂に入っている、慣れた手つきでラインを引いている。服装も洒落たスポーツスタイル、白いTシャツの背中にはBASKETBALLとイラストと文字。「そのタイツはスポーツ用ですか」半ズボンの下に黒いタイツを履いていた、オレも同様半ズボンの下に黒い“パッチ”を履いていた、遠目には同じように見えるのではと思うが厚かましいか。「実は膝が悪いので、サポータータイツを履いている、スポーツをやるときにこれを履いて締めつけると膝にいい」膝痛で悩んでいるのは老人、加齢だけでないのだ。スポーツ選手は膝に限らずあらゆる所を痛めているようだ、身体の酷使、事故、怪我が原因だそうだが、スポーツ音痴には「え、そういうことか」とわからないことが多い。山によく登るが、仲間いろいろ工夫していたなど今頃気づくが、その時は何をしていたのかわからなかった、次回詳しく聞いてみよう。テープやサポーターはスポーツの最中に、運動しているときに付けるのだ。普段締めつけるのではないのだ、オレは反対の事をしてきた。「こうしてまっすぐ足を延ばして、30秒を何回か、これで筋肉が鍛えられて膝にいい」とも。テーピング、サポーターはどのように使う、何処に使うは、スポーツ選手にとって常識のようだが、素人であるオレは全く知らない。膝は何とか克服したい。

10年前回転寿司屋で貝をガリッと噛んだ時「イテテ」となって、慌てて友人の歯医者者に駆け込んだ。「もっと早く来んか、そうとう傷んでいる、虫歯は1本もないのに・・・」と歯周病。それ以来2、3年何度も通った。「歯周病は元に戻らない、治らない、現状を維持するだけ、傷みを取る治療をするだけ」と聞いた。何度も痛くなって、ガリガリ、神経を抜こう、歯を抜こう、ガリガリが続いた。最近は痛くならなくなったので検診をさぼっている。酒の量が減った、マウスピース、歯磨き、歯間ブラシ、とこれらが功を奏しているようだ。少々痛くなると歯磨き、歯間ブラシで擦っていると出血して、これでスーっとする、これで治る。「お前、検診コンカ」と思われているかな。現在は、虫歯ゼロ、奥歯1本欠損、奥歯1本神経欠損（こ歯はなんと、すぐに抜けるぞから7.8年しがみついている）今はなんとか“だましまし”安定している。食事には不自由がない。

同級生の先生、サッカーのゴールキーパーをやっていたので、指は太い、たのもしい。

#### 0113 閑谷学校 121012

閑谷学校に行ってきました。今回で3回目だけど、車を停めてその塀や建物が目に入ると、1回目と同様「やあすごい、いいなあ・・・」とまたまた感激、「いやあこれは違う日本だな・・・」と。公式ホームページの解説文をどうぞ。

閑谷学校は江戸時代に建てられた、旧岡山藩直営の庶民教育のための学校です。国宝の講堂をはじめ、聖廟や閑谷神社などほとんどの建造物が国の重要文化財に指定されています。樹々や花々が四季折々の彩りを見せ、訪れる人を楽しませてくれます。

現在目にしていただくのは、元禄14年（1701）に完成した閑谷学校の姿です。創建は寛文10年（1670）岡山藩主池田光政によって成されましたが、武士の子弟の学ぶ藩学校は岡山城下であり、閑谷学校ははじめから庶民を中心とした学問所としてつくられました。

象の背中のような形状の石塀が学校の敷地全体を囲っている。直線にまっすぐ伸びて少し曲がって山の麓まで行って、後もずっと途切れずに大きな敷地をグルリと一周している。石は積んでいるのか貼っているのか、一つ一つ違った形の石が塀の背中の曲線にそって並んでいる。隣の石とまたその隣の石との間に隙間が無いようなまでにけずられ

そがれ（削られ削がれと漢字で書けば同じ字なのだ）並んでいる。この石の塀の作り方は日本的でない異な空間、不思議な雰囲気だ。友人がその写真を見て「インカ文明を想わせる」と表現したが、オレは琉球、中国、韓国を思っていた。ただ石の建造物という事ならもっとすごいのが外国にはいっぱいある、日本には石の建造物が少ないからこの程度で嬉しくなっているのだが、と言ってしまうと身も蓋もない話だけれど・・・。

秋の晴れた昼間、今回は中に入らず閑谷学校の周りを感じてみたかった。周りには人家が一軒もない。“田舎”と呼ぶにふさわしいたたずまい、後が小高い山、閑谷学校が無ければ人っ子一人いない処、川が流れ人の手が入らない雑木林。鳥も虫もたくさんいる、小動物も獣君もたくさんいるだろう。

以前来た時大きな青大将がこの塀の横をグネグネ逃げていったのを思い出し、ついでに家の近所で先日来一週間のうちに二度も蛇に出くわしたのを思い出した。その思い出した場所はいつも行く安威川の河川敷、2匹とも70.80センチぐらいの小さい奴で、1回目はすりと目の前を横切って草叢に入って行っただが、これは普通の縞蛇だったと思う。2回目のはスリリではなく多少緩慢にヌリリかな、そして横に方向転換、オレも止まってしっぽを靴で撫でてみるとヌリリとこちらに、色は黒で横っ腹にオレンジの斑点、コレはひょっとしたらヤマカカシかも知れない、と思っていたら川の方に逃げていった。おっさんが丁度魚釣り中だが教えてやれば卒倒でもしかねんと黙って走り去った。以前ヤマカカシの画像を見て、大峰の山の中で見た喉の辺りがオレンジ色のやつ以外に、日本全国の川やら田んぼに、黒い物やら茶色の物やらたくさんの種類がいる様だ。今回見たのはそんな中のひとつかもしれない。いずれにしても今年の夏は一匹もお目にかからなかったので続けて二度も、しかも最後のやつがヤマカカシとは嬉しい限り。「蛇に会うのが嬉しいのかな・・・」と問われれば、「そりゃ 奴等が生きて、栄えて、繁殖して、また来年出て来てくれるのは、嬉しいことだ」といいたいね。

と蛇の話に飛んでしまったが、この閑谷学校、家一軒ない環境、不思議な意匠の塀と建物、備前焼の赤っぽい焼き締め瓦、魅力的な異空間に満喫。その後、牛窓の朝鮮通信使の海遊文化館に寄った。

図版「ヘタクソ、こんなのじゃないぞ」と言われそう。

0114 タカチホヘビ かな・・・ 161012

先日来の膝イタ、どれぐらい登れるか、どれぐらい体力が弱っているか、どれぐらい踏ん張れるのか、それとも、もう元に戻って治っているかと琵琶湖の湖西（この辺りを湖西地方と呼ぶ）比良に向かった。前回同様7:50分発の電車で茨木を出発して、北小松駅で登山靴に替え9:00にスタートした。1時間登った時に、膝サポーターを付け忘れていたのに気付いて、靴を履いたままで膝まで押し上げる。そうそう1時間と申しますが、1時間歩くのを“一本”とか“ワンピッチ”といいながら登ります。いつも山岳部出身の澤山さんと登っていて55分歩いて5分休む、という1時間の行動パターンを守ってきたので、山に入ったら1時間は歩かないと休憩しないというのが身に付いているようです。どうも山岳部の約束事のように、もうへろへろ休みたい、もう止まりたい、もう座りたいと思っても前を歩く背中はずまらず休まず、「ぼちぼち一本取りましようか」という言葉を待ちに待つとか「もうツウピッチで頂上」という会話になります。

話はそれますが、500メートルぐらいの標高の所で蛇に遭遇。彼らも冬眠時期が近付いているのじゃないのかなと杖で触ってみると敏捷にニョロニョロと横切って行った。親なのか子なのか30センチぐらいの小さい蛇、縞蛇をそのまま小さくしたようなスマートというか細いペンシル蛇、色は黄土色を渋くしたような色、下の方に消えていった。ラッキーな事にまたまた蛇に会えた嬉しいかぎり、先日来続けて二度も見たのにもう一匹追加だ、うれしいねえ、蛇君。<この時蛇嫌いの中西プロより連絡、住環境から、タカチホヘビかな？と・・・>

前回の一本目は登山道の途中で休んだが、確かすぐに分岐の標識がある処と、2.3分も行くとあった。パンを食い水を飲んで、先ほど言ったサポーターを付けた。休みのときには必ず何かを食っている。仲間が「燃費が悪いねえ・・・」と冷やかすが、本当に腹がすく、腹がすいてはドカリと体力が無くなる、何かを食わねばふらふらする、と言い訳しつつ、食っている。パンが多いが、ゆで卵、おにぎり、バナナ何でもうまい。歩きながら前回は3本目で弁当を食ったとゴクリ、空が曇ってきて、もしや雨かと、もし雨なら弁当を食って帰ろうかと、多少疲れたかな、やはりこれでは体力が減っているのかな、と弱気に登って行った。前回の弁当“釈迦岳”を15分前に着いたので、「もうちょい先に行くか」と元スキー場の辺りを登り始めた。ススキかすごい、元スキー場一面に、木の生えてない処にススキが生い茂る様は圧巻、ススキの中に紅葉した赤い葉が処々に在るのがいい、シルバー色の中の赤だ。絵にも描けない美しさとはよく言ったものだが、オレの為に在る言葉かなとも、写真もオレが撮るとその良さが出ない、写真の腕も下手だと思いつつパチリパチリ。弁当に梅干を入れておいた、すっぱい、うまい。パイと吐いた種も紅葉の赤色だ。

「ええい元気が出たもつと上まで行くぞ」と登って行くとお気に入りのブナ林、普通にまっすぐ伸びているブナ林の中に、ぐにゅぐにゅ曲がった大木、2本3本と根元から枝分かれした大木がある。いい姿だ、おもしろい柄模様だ、とその形その色に感激するが、それなのに葉っぱの色は形は妙に上品で可憐で普通だ。

結局今回も武奈ヶ岳に登れて、谷で水を汲んでぐいぐい飲んで、ほいほい歩いて、ほいほい降りて、田圃を歩いて、5時過ぎの電車に乗って帰った。

0115 朝鮮通信使聞きかじり 211012

秋の晴れた日、コレは高層道路か、と思うようにスイスイ走れる道路、制限速度は60キロの自動車専用道路“岡山ブルーライン”に入った。牛窓に行きたいが岡山行きと書いてあり大丈夫かなと思いながらも、ナビゲーター君を信じて走った。途中に展望台が在りと書かれた“道の駅”があったので一時停車して降りてみると絶景である。瀬戸内海の海の中にあちこち島の緑、川のように水が流れている、陽に照り返ってキラキラ光る水、暗く沈む水、何故そこだけ穏やかなのだと静まり返った場所、島々は橋もなく船での往来か、それとも無人島か。

小高い山の上、牛窓の標識を見つけて進むと、眼下に平地が広がる、平地と言ってもなんだか整然とし過ぎて不自然と思ったが、後から塩田跡と聞いて納得、次回機会があればそこも覗いてみたい処だ。なんだか穏やかな田園地帯が見え始め、右に左に曲がって進むと海に出た。“海遊文化館”の標識を見て海沿いを、人家の中を、昔懐かしい鄙びた商店街の中をゆっくりと進むと、昔の木造建て警察署の建物と思われる目的地“海遊文化館”に到着。4.5台の駐車スペースには車が無いので、来客は少なからうと「おお警察のマーク」建物の入口の上に旭日章（東天に昇るかげりのない朝日の清らかな光を意味するという：とWEBで解説文だが、大層な意味だね）

入館料300円と書いてあるが、65歳以上250円ともある。今回初めてこの特権を利用した。先日スポーツ保険に加入しよう資料を見たら、65歳以上半値とあるのでラッキーと申しこんだが、5人以上でないと加入できないとかで断られた。今回初めての特権利用が半値ではなく50円引きとは残念だがこれもまたよし。“海遊文化館”に展示された船の形をした祭りの山車（だんじり）はすごい。岸和田の山車もすごい、祇園祭の鉾はもっとすごい、と思っていたが、ここの竜やら、象やら、麒麟やらの彫刻が太くて力強い、彫刻そのものを持って、引っ張っても、押してもいいような構造になっている。100年、200年経ったものが10台足らずあって、牛窓の街中を練り歩くとか。

朝鮮使節団と思っていたが、正式名称は朝鮮通信使という。以前の時代にも有ったらしいが、江戸時代 200 年の間に 12 回あったものを、朝鮮通信使と言うらしい。初めの 1.2 回は朝鮮戦争で日本に連れてこられた捕虜返還、後の方は徳川家の将軍職就任祝いが目的と書かれている。牛窓は通信使の宿泊場所であった。500 人の朝鮮人、その接待の為に 1000 人 2000 人の日本人、と鄙びた町はてんやわんやの様が見えてくる。

通信とはお互いの信（よしみ）を通わしあうという意味で、朝鮮王朝では朝鮮通信使と呼んだ。両国の主権者代表として朝鮮国王と徳川幕府の間で国書が交わされた。（とWEBで解説文）

野次馬根性で不思議を思ってみた。

接待、宿、食事、寝具は誰が世話した、誰が支払をした、誰が命じた・・・。

このまま次の通信使が来るまで隠れていようとか、使節団を逃げ出して、日本居着いた朝鮮人がいたのだろうね。

返礼の使節がなんでないのかな。

当時の朝鮮と日本の違いは、文明、文化、思想、芸能、服装、住居・・・ともっとたくさん知りたいね。

女の人も来たのかな。男は子孫を残していかなかったのかな。

捕虜返還で儒学者は帰って行ったが、陶工は日本の方が身分差別が無いので、居心地がいいと帰らなかったらしい。

当時描かれた通信使の風俗画、絵巻物はいいなあ。

200 年で 12 回だけだが、当時のそれを見た庶民は、驚いて楽しんだのかな。

図版は恒例、定点観測。

#### 0116 楽器の話 221012

Face book で友人のひろみ君が一週間先に誕生日と“お知らせ”が届いた。Face book 氏こんなことまで教えてくれるのかと感心、感謝、が 12 月のオレのときには勘弁してほしいな、いささか鬱陶しいなとも複雑な心境。めでたくもないのに「おめでとう」と言葉が飛び交い舞い散るのは正月だけでいいと自分勝手な天の邪鬼かも。とはいいいながらひろみ君にはなんて言おうか、何を書こうかと思案していたが、おめでとうとピアノを弾いているスケッチを添えようと決めて誕生日前日を持った。

Face book 活用術が未だ胡乱なオレ、いい方法を見つけた。「今なにしてる」と常時書かれたコメントの欄が在り、そこに「今なにしてる、と聞かれて、オレは今・・・」と文章を続けければいい、それだと知人全部に流れる様だ、一人一人の個人の方とのやり取りは普通メールがいいし、この書き出しは今昔物語の書き出しを彷彿とさせ、なかなかお洒落で恰好がいいじゃないか、などと様々勝手な事を考え想って悦にいつている。Face book のやり取りを見ていると、皆さん 2.3 行の簡単な文章、単純な内容、徐々に会話が 1 行になって、「そうだね・・・」「違うね・・・」となり完結していると思えば、「先日のアレはコレだよ・・・」「いやいやコレのアレはコレだよ・・・」などと前後の脈絡がわからないと理解のできない、判じ物のような、チャットのような文章が突然現れる、とこのような形態、やり方、やり取りは好きじゃないので、はなはだ勝手だけでも、自分のいいたい事を言うだけ、言いつばなしスタイルで行こうと決めた。皆様からのコメントは来るが、ヘンナシで失礼します。本当にごめんね。

話はそれでしたが、ひろみ君は芸大のピアノ科を首席で卒業したピアニストだ。オレなど芸大には拒否されたし、賞罰が一切ないと自慢にもならない。ただ音楽音痴、無知のオレだが、楽器が好きで、楽器と人の組み合わせが好きで、楽器を演奏する姿をスケッチしたいとコネを頼って、音楽大学に何回も通った。バイオリンは右手で此処を持って、左手で弓を持ってとか、チェロの弓はこう持つとか、太鼓は何処を叩く、木琴はこう叩く、ラッパは此処から吹く、

此処を手で押さえると描いているうちに、音も自然と聞こえてきて、楽しみながら、彼らの彼女らの楽しさを戴いた。ジャズも見た、雅楽も見た、能の楽器も味わった、と彼らの楽しさを戴いた。

楽器が弾けるのはいいなあ、といつも思う。子ども時代にハーモニカで“荒城の月”を吹いていたのは懐かしい思い出、まだ吹けるかな。

#### 0117 続・楽器の話 241012

パイプオルガンの存在は音は知っていた、大きな音楽ホールや、ヨーロッパの教会に煙突がいくつも並んだ建物の一部のようなデッカイ物がパイプオルガンだという事は。しかし実際に演奏しているのを見たのは初めてだった。音楽大学のホールに備え付けられたパイプオルガンを若い女性が弾いていた。音楽ホールのズシリ大きい扉を押すと、パイプオルガンの重い音が音楽ホール全体を震わせていた。パイプオルガンが備え付けられたホールの前方を見ると下の方に在る扉が開けられ、その中に肝心かなめの鍵盤があり、壁にはいくつかのスイッチがあり、足元にはペダルがと運転席のように並んでいる。背中を見せ椅子に座っている女性が向こうを向いて両手で鍵盤を叩き、そして時々スイッチを押したり引いたり、両足も時々ペダルを踏んだり離したりしている。女性は顔も表情も後ろ向きなのでわからないが短いスカートが深紅の格子模様だったのと、黒いタイツの両足が右に左に忙しく動いていたのが、未だに印象に残っている。流れていたのがバロック音楽なのか讃美歌なのかフーガなのか、ホール全体に鳴り響いていた。

続いて面白かったのが、パーカッションというカリズムの部屋。オーケストラでよく見かける大きな太鼓、形がそれぞれ違う太鼓、中太鼓、小太鼓、木琴にマリмба、そしてこれも楽器なのかなと思えるような、木や金属の棒やら塊やら、皆さんがそれらの楽器をポコポコ、パカパカ叩いている。皆さん立って両足を踏ん張って、身体をくねらせて、素手で、棒で、バチで右に左にと叩く叩く。なんとなんと部屋中が怪しげな、しかも魅力的な雰囲気、蠱惑の世界、身体が自然と揺れてくる、頭の中に次々と音が飛び込んでくる。分かるでしょう、大太鼓がどんどこ鳴ると、アフリカンピープルが太鼓を叩きだすと、肌が引き締まり鳥肌だって、頭が酔ったようにボウツとなって、身体が揺れませんか・・・。

吹奏楽の部屋は「喧しい」と言えば失礼だが、鼓膜がゴソゴソ鳴るのを感じる。若いころ覗いたディスコのエレキ音楽の大きな音も鼓膜がゴソゴソ鳴っていた。いつも行く安威川の河川敷で時々管楽器の練習をしている若者に遭遇するが、彼ら彼女らはまだまだ初心者で音も弱くすぐに途切れる、オレが見ても、間違ってるよ、弱いよ、ハモッてないよ、音楽になってないよと聴こえるが、さすがにここはプロ養成の音楽大学、音楽創りは音はさすがにすごい。トランペット音が一番大きいのかな。クラリネット、トロンボーンもいる。軍隊、消防の音楽隊で見かけるおなじみのグルグル巻いた楽器、煙突の様なやつ、ペンシルサイズの小さい笛と此処も様々な楽器がある。ハハハ、この部屋は元気がもらえるね。

ふと考えたが、人間、我々、人の声は肺から出る空気の流れで喉の弁を震わせ、口が楽器（共鳴板）となって外に出ていく仕組みではなかったのかな。吹奏楽器はそれと同じく、人の吹く空気が、筒の中の弁を震わせ、管（くだ）が楽器となって音が出る音楽が鳴ると考えれば、吹奏楽器は人の声の延長、歌う、叫ぶ、話すと同じようにできるかも、同じように演奏すれば、ますます音楽がよくなるのではと、素人考えをしったり顔で・・・。

それにつけても楽器はいいね、楽器を鳴らせるのはいいね、自由自在に演奏できれば、オレの世界も広がるだろうな、と無い物ねだり。図版はパイプオルガンを描いたO I L。

誠二さんが六甲山頂に引っ越した。「お茶かい、お酒会、来ませんか」とメール連絡で誘いを受けた。春、オレの展覧会の折「六甲に家を買った、遊びに来て」と言っていたのを上の空で聞いていた。まさか山頂とはとびつくりするやら、それはすごいと嬉しいやら、どうしてそこまで行こうか、車か、電車ならどの電車かと思案するやら。メールには詳細地図が添付され、見るとケーブル山上駅より徒歩5分だとか。よしそれならあまり行かない六甲山、登るぞと決めて調べてみたが有名な六甲山、都市近郊の六甲山には無数の登山道がある、と迷ったが、加藤文太郎を思い出し「まさか縦走は無理かな」と調べてみると5.6時間で行けるようだ。

30歳の頃1.2年西宮の海岸べりに住んでいた。前は海、後には六甲山がぐいぐい迫っていた。一日中海から山からと風が吹いていた。ある時間になるとピタッと風が止まって風の時間、そしてまた反対側から風が吹く、という繰り返しの風は懐かしい。「風が吹くのはいいものだ、此处は無風地帯か・・・」と今の所に住み始めた頃はよく思った。大阪平野には風が吹かない、阪神間のあの風が懐かしい。

え、六甲山のとっぺんに引っ越した、と驚いて嬉しくなって、それならあまり行ったことが無い六甲山に登ってみよう、その足で誠二さんの家をたずねよう、と阪急電車宝塚線の車窓を見ていた。話は脱線しますが「おや、あの建物のタイルの配色多少ましかな」と思える2.3階建ての建築物発見。あれは合格と思いつつ、今の建築家外壁の色は下手だなあといつも思っている。1000年単位で続いた建築様式、日本なら赤、黒、白と思いきった色を組み合わせてしかも決まっている、存在している、まわりに溶け込んでいる。外国、石造り無彩色の中に、赤、緑、黄と生き生き彩色されている。似通った色を並べる、白を混ぜた色、パステルトーンそういう色どうしを並べる、グレーの濃淡で配色する、そういう方法は無難で失敗もない、なんとなく上品で、粹で、洒落て見えるが、もっともっとズバリ、ぼっそり決めてみませんか。みなさん、オレンチの“色男講座”を聴講に来ませんか、10回20回講座を受け実験を続けたらひょっとしたら色のセンスがアップするかも、色男になれるかも。なんてえらそうに申しまして、失礼しました。

宝塚駅を出て「ええと、どっちかな」と昨夜調べた地図を見ながら人が車が行き交う市街地を通り抜け、目的の林道が見つけまっすぐに歩いた。それから登山道に入り多少勾配がきつくなり、汗が出る、どんどん歩く。2時間も行くと上り下りのなだらかな山道になった。山仲間の山下さんが「毛ばかりの山は嫌だよ、つまんないよ・・・」とよくぼやいていた。1000メートル足らずの六甲山、木々が生い茂り見えるのは木の幹、木の枝、木の葉、そして木漏れ陽の輝き、上を見ると葉の間に青い空が少し見えるだけ。山に登ると森林限界という言葉がある。2000メートル、2500メートルを超えると大きな木が無くなって、人の背丈より低い木か草しか生えない。そういう低木の所を歩くと360度全展開、向こうの山もこっこの山も、下を見ると街やら海やら川やら、空も満天である。此处六甲山も展望できる所があれば下には神戸の街が、海が船の行き来がまる見えのはず。夜景ならすごいだろう。昔100万ドルの夜景とアメリカのニューヨーク、ロスアンジェルス、サンフランシスコの写真を見た事があるが、今の神戸はもっとすごい事になっていて、何倍もの明るさの何倍もの数の電灯や電飾がチカチカしているだろう。オレも同じように「毛ばかりの山は嫌だよ、つまんないよ・・・」ぼやいてみたい。これだけ有名な山だからほかに魅力がいっぱいあるだろうけれど、景色が見えない、人が多い、上は車道がいっぱい、歩くのが怖い、とぼやきが多い。

誠二さんの家に到着。庭の水道で身体を拭いて着替えて中へ。古家を改装したというがなかなか素晴らしい、敷地も家も広い。まずはチャイ、甘くて旨い。「今日は飲まないよ」「みんなが揃うまでちょっと・・・」といいつつ、お酒を戴き、チキンを戴き、芋を戴き、パンを戴き、サーモンを戴き、楽しい時間がどんどん過ぎて、お暇をしたのは夜の10時。

図版は、先日来の楽器の話から、水彩画をはがきに描いてみた。

道教・儒教と言葉は知っている、なんとなく知っているようでまるで知らなかった。道教の大先生、莊子という人の本を“つまみ読み”して2500年前の中国にすごい奴がいたもんだ、コレは嬉しくなる考え方、コレはオレの探していたものだ、コレはいい、コレはすごい。解説の一文に「成功して功なった中国人は常に儒教の徒であり、失敗して尾羽うち枯らした人なら道教の徒だ」とはオレの事かと言いたくなるぐらいにうまいことをおっしゃる。

殿様と車作りの会話「あなた様は何をお読みになっていますか」「古の人の教えを読んでいる」「その人は亡くなった人ですか」「勿論亡くなっている古の人だ」「あなたはその人の滓を読んでいます」殿様は「その雑言、何のことだ、許さんぞ」と怒った。「私はこのように老人になっても車を作っています。この術、木を叩く、木を削る、引いて押して組み合わせる。この技術は教えようにも教えられない、語ろうにも語れない、見せようにも見せられない」「古の人の教えの中に教えようにも教えられない、語ろうにも語れない、見せようにも見せられない、といった処がたくさんあるはず、だからそこに書かれているのは、滓の部分です」

この話を読んで「尾羽うち枯らした人達よ、お前さんよ、間違っていないぞ、そのまま進め」と言われたような・・・。オレ、60歳代にして青二才、持っているワザ、感性、感覚は、教えようにも教えられない、語ろうにも語れない、見せようにも見せられない、このまま死ぬまで使い切れということだ。

先日、木が生い茂った山道を歩いていた時「木の幹が、木の枝が、木の葉が邪魔をして向こうの景色が見えないとぼやいた」オレは本当に木の幹を見ていたのだろうか、木の枝を見ていたのだろうか、木の葉を見ていたのだろうか。それとも幹の向こうを、枝の向こうを、葉の向こうを見ていなかったのだろうか。さあ考えよう、木の幹が、木の枝が、木の葉があって、その向こうに又木の幹が、木の枝が、木の葉がある。こちらにはオレの目がオレの心があって、オレが居る。「見ようとするオレ、向こうの景色がみたいなと思うオレ」「見えないのなら、見なくてもいいよ、見なくても歩けるよ」という声が聞こえる。

これも、「ぼやくな、山を楽しめ、山を歩け」ということか、と俄然嬉しくなった。